伊達市小国地区“小国やまぶきおしゃべりサロン”での活動
“微生物の話しを聞いてヨーグルトを作ってみよう”

9 月 25 日 13 時～15 時 30 分の間、福島県伊達市小国地区交流館で、“小国やまぶきおしゃべりサロン”に所属する１４名の会員の皆さん（写真）にバイオキッズの活動“微生物の話を聞いてヨーグルトを作ってみよう”を体験していただきました。

内容はこれまで主として小学生対象に行われた活動、“めざせバイオ博士（財団法人バイオインダストリー協会作製）”を中心とした、地球上になくてはならない微生物の話、顕微鏡の話とカード式顕微鏡の作製、ヨーグルトの話、ヨーグルトの試食と調製です。

先ずは微生物とはどんなもので、ヒトの生活とどのようにかかわっているか、という話をスライドで見聞していただき、その後カード式顕微鏡を各自に作っていただきました。参加者の平均年齢は 60 歳代なので、ビーズをカードの穴に載せるところで苦労された方もおられましたが、全員見事に完成され、赤い糸を観察されたときには、小学生より大きな感嘆の声が上がりました（写真 1）。

しばしの休憩後、株式会社・明治の梁原智晶さんにヨーグルトの話しをしていただきました。今回はいつものヨーグルト LG21 と共に参加者の年齢を勘案されて中高年の体調管理に効果がある R1 という製品を提供され、皆さんに試食していただきました。その後、500ml のカートン牛乳を利用し、LG21 ヨーグルトを種とするヨーグルトの調製を皆さんに体験していただきました（写真 2）。翌日には、皆さん自作のヨーグルトを楽しまれたようです。

写真１　手製の顕微鏡をのぞいて見る

写真２　ヨーグルトの調製

前日に会場の下見に伺ったときは小雨混じりの肌寒い陽気でしたが、当日は暖かい好天に恵まれ、交流課の立派な施設で皆さんの歓迎を受けつつ楽しく活動させていただきました。ただ、会場の周囲には、本来あるべき田んぼに稲穂の姿が見られず、休耕田の寂しい情景が印象的でした。会員の皆さんお手製の心のこもった昼食をいただきつつ“小国やまぶきおしゃべりサロン”の活動についてお聞きしたのですが、5 年半前の東日本大震災で生じた原発事故の影響はなまじのものではなく、現在も解決には程遠い状況にあるとのことでした。今回のバイオキッズの活動を温かく迎えてくださった皆さんに心より感謝申し上げますとともに、一日も早い復旧を祈念致します。

付記

“小国やまぶきおしゃべりサロン”での活動を終えた翌日、今回サポートしてくださった BFK 会員の加藤剛氏（かつて現役の頃福島、相馬地域に駐在しておられたことがあり、東日本大震災以前の該地域の様子に詳しい）の案内で相馬市松川浦、南相馬市原町地域を訪問させていただいた。

小国から相馬市に向かう国道の対向車線は大型トラックがひっきりなしに走ってくる状況で、いまだに汚染土壌の回収をはじめとする災害の後処理が活発に続けられている様子が伺えた。

松川浦の海岸・埠頭では復興工事が大規模に進められているが、近くの原釜地区・笠岩公園には相馬市伝承鎮魂祈念館と慰霊碑があり、記録映像ならびに展示されている遺品により大地震とそれに続く大津波による被災の様子があらためて胸に迫ってきた。その後、国道 6 号線を南下して原町近郊に向かう。国道は開通しているが、国道から東にある海岸に向かう道路への進入は規制されているところが多くなってくる。そして、国道から離れた人気のないところでは、ときに取り囲んだフェンスのすきまから積み重ねられた黒いビニール袋が認められ、放射能で汚染された土壌の集積地であることが窺われた。

原町を流れる新田川は、かつては遡上する鮭が評判の地域だったとのことだが、河口周辺と思われる広い扇状の海岸領域は多くの建物を含めて津波の甚大な被害を受けたようで、一面の荒れ野原の中に廃墟のような建物が散見される状況だった。取り残された建物の残骸の海に向かう面は窓枠のみが残る状況（写真 3)、豊かな杉林だったかと思われる林は津波に伴う塩害で緑を失った木々がまるで亡霊のような姿で立ち並んでいた（写真 4)。

災害から 5 年半が過ぎた今もなお大震災の影響から復興への道は遠く、特に放射能の影響については未知の部分も含めて長期の観察と対応の必要性を再認識させられた訪問であった。BFK の活動が今後も何かの形で被災地域の復興に貢献できるよう願ってやまない。

（文責:永井和夫）

写真 3　津波の被害を受けた建物
手前が海側に面している

写真 4　津波で枯死したと思われる木々の姿